



No.185

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
 総合病院 聖隷三方原病院
 聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
 静岡県浜松市北区三方原町3453
 TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
 編集者 横地健治

2018年5月1日

「心を聴く」

横地健治

有意な言語理解のない重症心身障害児者の聴覚世界はどんなものかを本通信でたびたび述べてきました。これは重要な問題なのでまた取り上げます。

ヒトでは聴覚は胎児期から機能していて、生まれた時には、母の声は聞き分けています。そして、1歳で初めてこ

とばを発するまでの間に、周囲で話されることばを聞き、その意味を学ぶ膨大な作業を独力で行います。これが可能なのは、進化によって獲得した言語解読機構を生まれつき持つていて、脳が持つる力の多くをこの時期のこの作業に集中するからだと考えられます。また、ヒトでは、胎生期から働いている脳幹聴覚機構に、生後進展する大脳聴覚機構を付加して、聴覚を処理しています。こうした連続性には聴覚世界を早期に進化拡大する

には有利なことです。これに対し、視覚では神経系の乗換えが起こります。もともと脳幹視覚系が機能していて、乳児期早期(生後2カ月あたり)にその系は機能を失い、大脳視覚系が取って代

わります。聴覚でみられる連続性は視覚にはありません。どうしてこうなるのかは、ヒトの大脳視覚処理はあまりにも高度なので、未熟な脳幹視覚系に結びつけることができなかつたのではないかと私は思います。そのため、現在は追視不能な重症心身障害の人が生後2カ月までは追視をしていたということが起こります。もちろん、この時の追視する対象の理解は極めて限定的なはずで

す。こうしてみると、聴覚は生き物にとつてより根源的なものであり、聴覚から言語を除いたものは、視覚ほど高機能のものではないと思われま

す。そこで、聴覚の役割を考えてみます。生物が生存するためには、食べ物を得ることが不可欠です。そのために外界を知る手段として感覚があります。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚です。味覚・触覚は身のまわりのものにしか適用できません。嗅覚では、臭いは拡散するので、それを発するものが離れていても認識できます。また、臭いはそこに残りうる

ので、かつて臭いを発するものがそこにあったことを認識できます。このように、嗅覚は時間的空間的な広がりを持っていきます。ただし、その精度は視覚・聴覚には劣ります。これに対し、視覚は、遠くの物、大きな物、動きがわかり、外界の対象認識は勝れています。ただし、暗かつたり、遮蔽物があれば無力になります。また、見たい方に眼を向けなければなりません。これに対し、聴覚は、遮蔽物をかわすことができ、対象と対面する必要ありません。ただし、常時間こえてくるものから、自分に意味がある音と声を抜き出す高度な作業が必要になります。生存に必須な食料の獲得と外敵からの防護を、仲間とともに行えば、それはより効率的に行えます。そのため、仲間とのコミュニケーションが不可欠です。視覚のコミュニケーションでは、初期は身振り、さらに進んで文字になります。これに比べれば、聴覚の優位性は明らか

です。ヒトは他の生物に比べると極めて無力な状態で生まれてきます。生まれてすぐでは、独力で食べ物を得ることも身を守ることもできません。この能力が育つまで、長い間を

母親の庇護下で過ごさねばなりません。そのため、この時期の認識対象としては、自分が食べる物や自分を襲ってくる物より、自分を庇護する者の方がずっと重要です。そして、この時期では、コミュニケーションの主対象はその庇護者でしょう。仲間とのコミュニケーションはその先にあるものです。この仲間とのコミュニケーションに使う聴覚信号が言語です。その前の庇護者とコミュニケーションが「うたうコミュニケーション(ことばの前のことば)」(やまだようこ、1987年、新曜社)という書名になっている言葉で表されるものだと私は考えます。

そうすると、新生児期から乳児期早期(生後3・4カ月未満)では、聞き取っているものの大多数は、母親が自分に向けて発している音や声だと私は考えます。これによって、自分に対する好意・懇願・要求・落胆・無視・叱責といった母親の心を感じているのではないかと思います。健康成人では他者の心を主に表情(まなざしを含めて)から読み取っています(語気からも補足的に察しています)。顔を

読んでいます。その時、聴覚言

顔を